心の貧しい人々、義に飢え渇く人々

奨励	越後屋 朗〔えちごや・あきら〕
奨励者紹介	同志社大学神学部教授
研究テーマ	旧約聖書研究、聖書考古学

イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。
「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。
柔和な人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。
義に飢え渇く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。
心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
平和を実現する人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害される人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

（マタイによる福音書　５章１―１２節）

今日の聖書箇所は、「山上の説教」と呼ばれる、たいへん有名なところの冒頭部分です。３章からなるこの長い説教は、イエスが一気に語った言葉をそのまま記録したものではなく、いろいろな状況でなされた多くの教えが一つにまとめられたもの、と考えられています。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」。よく知られている言葉です。「心の貧しい人々」とは一体どのような人々なのでしょうか。神を信頼する謙虚な人々、自分の内に救いの可能性を全く認められず、神にのみ頼まざるをえないことに気づいた謙虚な人々、と解釈されることが多いようです。

三人称から一人称・二人称へ

３―１２節全体を見てみましょう。内容ではなく、文体に注意してみると、途中で変化していることに気づきます。人称の変化です。三人称の文体が一人称・二人称の文体に変わっています。

最初は、「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる」とあるように、「人々」「その人たち」といった三人称となっています。それが、「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである」という１１―１２節で、「わたし」という一人称や「あなたがた」という二人称が使われています。

三人称、それと一人称・二人称の違いをどう考えたらよいのでしょうか。最初に「心の貧しいあなたがたは、幸いである」とは言わず、「心の貧しい人々は、幸いである」とイエスは語っています。イエスの教えを聞いている聴衆は、「心の貧しい人々」に自分自身が入るのかどうかはっきりしません。イエスは、聴衆のなかに「心の貧しい人々」、神を信頼する謙虚な人々とは言えない人がいることを知っていて三人称で語ったのかもしれません。あるいは、最初に三人称で間接的に語り、最後に一人称・二人称で直接的に語ることで、イエスは自分自身の教えを効果的に、劇的に語ろうとしたのかもしれません。いろいろと考えることができます。

後代の付加

一人称・二人称の部分である１１―１２節には、イエスのために迫害を受けることが語られており、そうした状況が実際にいつごろ起こったのかと考えると、イエスが十字架にかけられる前ではなく、イエスが十字架にかけられた後、キリスト教の教会が設立されてからのことではないかと推測できます。つまり、１１―１２節は人称の変化とその内容からイエス自身の言葉ではないのではないか。つまり、１１―１２節は後からの付加と考えられるのではないかということです。３―１０節に、後になって１１―１２節が加えられたということです。３―１０節が一つのまとまりをなしていたことは、３節と１０節に「天の国はその人たちのものである」という同じ言葉が出てくることからも言えるかもしれません。同じ言葉、同じ表現、同じ文を最初と最後におくことで全体を包み、一つのまとまりとして提示するという技法が使われているからです。この技法はインクルジオと呼ばれます。

それでは、どうして１１―１２節が付け加えられたのでしょうか。イエスを信じることで、つまりキリスト教徒であることで、実際に迫害があったのだと推測できます。マタイによる福音書２３章３４節によれば、マタイの教会はユダヤ教側から迫害され、苦しめられていたことが分かります。その状況が１１―１２節の背景にあるのではないかと思われます。

では、どうしてこの箇所に１１―１２節が付け加えられたのでしょうか。それは、１０節に「義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」とあるからです。つまり、１０節の教えが、キリスト者として迫害されている具体的な状況のなかで、迫害で苦しんでいるマタイの教会に直接向けられた言葉に拡大されたのではないか、ということです。

後代の付加の重要性

後代の付加、後からの付け加えたものと聞くと、イエスの本当の言葉ではないから、重要ではないとか、価値が劣ると思われるかもしれませんが、おそらくこの１１―１２節を加えたマタイは、イエスが今この場におられたなら（すでにイエスが十字架にかけられてから40年ほど経っていますが）、きっと自分たちにこう語るだろうと思っていたのでしょう。あるいは、直接的にこう語ってくれるはずだとの確信があったのかもしれません。ここにはイエス・キリストへの信仰が表現されていることに注意すべきです。１１―１２節は、マタイの教会にとって大きな慰めとなったはずです。

イエスが活動したのは今から２０００年近く前の、現在のパレスチナ・イスラエル地方です。それとは全く異なる状況に、私たちは今こうしています。イエスの言葉はやはりある特定の時代状況、歴史的状況に制限されていると思います。そうした言葉を今どう読み、どう解釈したらよいのでしょうか。それには、聖書に残されているイエスの活動、そしてイエスの言葉を頼りに、今イエスがここにおられたなら何を語り、そして何をするのかを思うこと、考えること、想像すること、それこそがキリスト者にとってとても重要な態度・姿勢ではないでしょうか。

ルカによる福音書６章２０―２３節

マタイによる福音書５章３―１２節とよく似たテキストが、ルカによる福音書６章２０―２３節にあります。ルカの箇所を読んでみます。

さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。
「貧しい人々は、幸いである、
神の国はあなたがたのものである。
今飢えている人々は、幸いである、
あなたがたは満たされる。
今泣いている人々は、幸いである、
あなたがたは笑うようになる。
人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがあ

る。この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。
しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、
あなたがたはもう慰めを受けている。
今満腹している人々、あなたがたは、不幸である、
あなたがたは飢えるようになる。
今笑っている人々は、不幸である、
あなたがたは悲しみ泣くようになる。
すべての人にほめられるとき、あなたがたは不幸である。この人々の先祖も、偽預言者たちに同じことをしたのである。」

マタイとルカの違い

マタイとルカ、共通するところがありますが、違いもかなりあります。マタイでは九つの幸いでしたが、ルカでは四つの幸いと四つの不幸が語られ、それぞれが対応、ペアとなっています。

貧しい人々　―　富んでいるあなたがた
今飢えている人々　―　今満腹している人々
今泣いている人々　―　今笑っている人々
人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき
―　すべての人にほめられるとき

マタイとルカを比較すると興味深い違いがあります。すべてを詳しく比較することは時間的に無理ですので、一部だけを見てみます。マタイの「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである」が、ルカでは「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである」とあり、「心の貧しい人々」が単に「貧しい人々」となっています。また、マタイの「義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる」が、ルカでは「今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる」とあり、「義に飢え渇く人々」が「今飢えている人々」となっています。言い換えると、ルカの「貧しい人々」がマタイで「心の貧しい人々」、ルカの「今飢えている人々」がマタイで「義に飢え渇く人々」となっています。

社会的、経済的なメッセージから精神的、信仰的メッセージへ

次のように言うことができます。ルカで示されている経済的な困窮・貧困が、マタイで精神的なもの、内面的なものへと変えられ、深められているということです。マタイにある言葉とルカにある言葉の違いをどう考えたらよいのでしょう。どちらもイエスの言葉なのでしょうか。どちらかがイエスの言葉なのでしょうか。あるいは、どちらがイエスの言葉に近いのでしょうか。

聖書学的には、ルカにある言葉が本来のイエスの言葉に近いと考えられています。イエスは、経済的な困窮・貧困にある人々に、神の国はそうした人々のものであり、飢えている人々は、満たされることになると語ったわけです。イエスは、現実の社会、世界に神が介入されること、神の国の到来が迫っていると考えたからこそ、こうした言葉を発したと考えられます。イエスはまさにその当時の、社会的、経済的状況に大きな関心をもっていた。そうした状況のなかにいる人々に語りかけたということです。

イエスは、神の介入、神の国の到来によって状況の逆転が起こると確信していたのだと思います。だからこそ、危険を顧みずに、過越祭（すぎこしさい）のころにエルサレムに行ったのでしょう。宗教は心の問題として、心の領域とかかわるものと捉えられることが多いですが、イエスはまさに具体的な、現実的な状況の変革・変化を求めていたということです。変革された状況、逆転された状況を「神の国」と呼んだのです。

マタイの福音書においては、社会的、経済的状況ではなく、精神的なことがら、心の問題、信仰の在り方が問題だったようです。だからこそ、そうした状況・状態に合うように手を加えたのかもしれません。マタイは、イエスの言葉を自分たちが置かれている状況に適応させたのではないか。今自分たちの状況にイエスがおられたなら、きっとこう語るだろう、こう語ってくださるに違いないと思ったのではないでしょうか。私たちもそれぞれの場で、イエスがおられたなら何を語るだろうか、何をするだろうかと思いつつ、日々歩みたいものです。

２０１３年9月２５日　今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録